



Title	英国人リバティの日本視察
Author(s)	平光, 睦子
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 210-221
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90148
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英国人リバティの日本視察

A・L・リバティ Arthur Lasenby Liberty (一八三四—一九一七) が、世界一周旅行の一環として日本を訪問したのは一八八九年のことである。一九世紀後半、ジャポニスムの潮流のなかにあった英国では、直接日本の地をその足で踏みその目で見定めた幾人かの英国人によって日本に関する情報もたらされ、英国における日本観の形成に少なからず貢献していた。リバティもそうした旅行者のひとりだったのではないだろうか。本稿ではリバティの日本での行動を追いその成果を問うてみたい。

リバティの日本滞在中の記録は、残念ながら残っていない。旅の一行は四人。貿易商のC・ホーム Charles Holme (一八四八—一九三三)、画家のA・イースト Alfred East (一八八四—一九一三)、リバティの妻、E・L・リバティ Emma Louise Liberty (生没年不詳) そしてリバティである。ホーム、イースト、リバティの三人はそれぞれ旅行記を綴ったが、そのなかで現在所在が確認されているのはホームの記録の一部とイーストの記録だけである。ホームの旅行記は二〇〇八年に『チャールズ・ホームの日本・北米旅行記』として、二〇一一年にはその一部の邦訳版が『チャールズ・ホームの日本旅行記——日本美術愛好家の見た明治』として発刊され、広く知られるところとなっている。また、イーストの旅行記は一九九一年に『明治日本の英国人画家——日本協会一〇〇周年記念版』として発刊されている。リバティ自身の日本滞在中の記録は消失してしまったが、幸い、夫婦の旅の証拠はリバティ夫人が撮影した写真とその写真に付されたリバティの解説として残っている。一九一〇年にはリバティ夫人が日本で撮影した一〇〇枚以上の写真のなかから選ばれた五〇枚を収録し、『日本——リバティ夫人の記録写真』が限定二〇〇部で発行されており、この写真集に掲載された写真と解説文は後に出版されたホームの旅行記にも収録された。リバティの旅は彼の同伴者たちが残したこれらの記録から推測するほかに、彼自身の旅の成果は旅の終盤に行われた講演と帰国後に発表された日本の産業美術に関する論文が伝えている。

A・L・リバティがリバティ商会を設立しロンドンのリージェント・ストリートに店舗を構えたのは一八七五年のことである。店の名はイースト・インディア・ハウス。その名のとおり、絹織物や刺繍、陶磁器、家具、敷物、骨董品、雑貨等、東洋からの輸入品を販売する店で、扇や壁紙等、日本の工芸品も取り扱っていた。店はエッセティック・ムーヴメントを追い風に順調に業績を延ばし、一八九〇年頃には国内主要都市をはじめ、フランス、米国、カナダなど、海外にも代理店をおくほどまでに事業を拡張していった。以下本稿では、この頃の英国におけるリバティとリバティ商会の動向についてはおもに『リバティ百貨店の記録』^{『』}にもとづく。

日本の工芸品とリバティがはじめて出会ったのは一八六二年のロンドン万国博覧会だったという。非公式な参加ではあったが、英国総領事、R・オールコック Rutherford Alcock（一八〇九—一八九七）のはからいで初めて日本セクションが設けられたこの万博は、英国におけるジャポニスムの起源に位置づけられている^{『』}。万博に出品された日本の品々は、漆工、象牙・貝殻・亀甲細工、七宝、木工、竹細工、陶磁、金工、武器、鉋物、紙製品、染織、地図、教材、玩具等、計六二三点で、自身も熱心なコレクターだったオールコックが短期間に収集したものである。万博の公式カタログでは、それら日本の展示品は次のような絶賛をもって紹介されている。「日本人特有のすぐれた才能によって生み出された産業と美術の作品は、きわめて種々多彩である。それらの多くは、単にヨーロッパの最高級の製作品との比較に堪え得るばかりでなく、多くの面で他の追随を許さない特質をそなえているのだ。」^{『』}多くの英国人はこの万博で日本の美術や工芸品をおおむね良い印象をもってはじめて認識し、リバティもそのなかのひとりだったのである。

万博が開催されたその年、リバティはファーマー・アンド・ロジャーズ商会のグレート・シヨール・アンド・クローク・エンポーリアムに職をえる。商会では万博終了後に買い取った日本の展示品を中心とした、東洋製品を扱う店を本店の隣に開店した。リバティはその新しい店につとめ、それから独立してリバティ商会を開くまでの間、ジャポニスムに熱狂する女性たちや日本美術愛好家のたまり場^{『』}となったその店で過ごすことになる。百貨店が登場する以前の「一八六〇年代のロンドンでは、日本や中国の品々を扱っていたのはリバティの店をはじめごく限られた小さな店だけだったのである。日本美術の専門家として知られるC・ドレッサー Christopher Dresser（一八三四—一九〇四）が一八八〇年に日本の製品を扱う店、アート・ファニチャーズ・アライアンス^{『』}の経営に乗り出したところにはロン

ドン^{『』}のジャポニスムの潮流も収束に向かいつつあり、リバティの仕事上の関心もインド、中国、ジャワ、ベルシャ等の他の東洋に国々に移っていったという。

同伴者と旅の行程

リバティ一行は一八八八年一二月に世界一周の旅に発った。日本に到着したのは三月半ば。香港から長崎に船で到着し、神戸、大阪、京都、琵琶湖、奈良、名古屋、横浜、東京、箱根、日光、鎌倉と巡り、リバティとホームは六月七日に横浜からサンフランシスコに向かった。日本の滞在期間は三カ月間足らずである。

その頃のリバティ商会は、絹織物、刺繍、家具、絨毯、陶磁器、骨董品、雑貨の七部門をもつリージェント・ストリートの店に加えてチェシャム・ハウスと名付けた店を設け、そこに日本の陶磁器、漆器、象牙細工、七宝焼等の骨董品と新しいものを置いていた。同伴者のホームは貿易商、リバティの同業者である。ホームは一八七九年にはドレッサーとともにドレッサー・アンド・ホーム商会をはじめ、インド、中国、ベルシャ、中央アジア、日本等、アジア圏の美術品を取り扱った。それとは別にホーム商会を開いて中国および横浜と神戸に倉庫を構えたが^{『』}、訪日以前に横浜とロンドンの店舗をモウ商会に売り払っていた。ホーム商会の日本の代理店をまかされていたジョージ・セールはリバティらの日本旅行にもたびたび登場する。もうひとりの同伴者、イーストは王立美術院の会員で、イングランドの田園風景を描いた風景画で評価された画家である。彼の来日は、ロンドンの画廊、ファイン・アート・ソサエティからの日本のありのままの風景を描いてほしいという依頼に応じたもので、帰国後には日本で制作した一〇四点の絵画を展示して「日本風景の絵画と素描」展が同画廊で開催された^{『』}。

彼ら三人の旅の計画がいつどのように成立したかはわからないが、リバティとホームは買い付け等一部商売を兼ねて、イーストはそれこそ仕事としての旅行であって、道中必ずしも一緒にいるわけではなかった。ホームやイーストの旅行記に「わたしたち」とあるからといってリバティが含まれるとは限らず、また、リバティとリバティ夫人も別

行動をとることがあった。それを前提にしてホームとイーストの旅行記を手がかりに旅の様子を見ていくと、彼らが行く先々で社寺仏閣等の旧跡を訪ね、博物館や展覧会で美術品等を鑑賞し、時には歌舞伎を見にもでかけ、富士山や日光等ではおおいに景観を楽しんでいることがわかる。京都では画学校を東京では美術学校を見学し、長崎では亀甲細工、有馬では籠細工、京都では金工細工、東京では宝飾細工等、工芸品店や工房に出向いて時には製作工程を観察し、古物商が彼らの逗留するホテルを訪ねて来たり彼らが骨董店に出かけたりすることもあった。七宝工芸家、並河靖之（一八四九—一九二七）と濤川惣助（一八四七—一九一〇）にも会っている。日本に滞在している西欧人や日本を旅行中の西欧人に会うことも多く、彼らの旅行記にはJ・コンドル Josiah Conder（一八五二—一九二〇）、F・ブリンクリー Francis Brinkley（一八四一—一九二二）、T・B・グラヴァー Thomas Blake Glover（一八三八—一九二二）、E・F・フェノロサ Ernest Francisco Fenollosa（一八五三—一九〇八）、J・M・ディクソン James Main Dixon（一八五六—一九三三）、J・R・キプリング Joseph Rudyard Kipling（一八六五—一九三六）らの名が登場する。また、日本人のなかでは佐野常民（一八三三—一九〇二）と親しく交流している。

こうして見ても、リバイティの旅はいわゆる観光旅行と大差ないものだったようだ。とはいえ彼ら一行の関心の中心は常に工芸や美術にあり、工芸家を訪ね、製作工程を目の当たりにし、日本美術の愛好家たちとの交流をはかる様子が旅行記には生き生きと描かれている。また、観光地の一角のふとした眺めや、道中の景観の美しさに感嘆する様子もたびたび記されており、リバイティ夫人の写真に切り取られた、何でもない道端の風景や街中の通り、そこで暮らす名もない日本の人々の姿が、彼らの視線がどういったものに注がれていたかを語っている。

「日本美術ニ關スル意見」

いよいよ日本を離れる日が近づいた頃、リバイティとイースト¹¹はそれぞれ依頼を受けて講演を行った。

リバイティは六月二日に上野公園でさよならパーティーを開き、その際、佐野の要望で東京美術学校の学生と日本美

術協会の会員らに向けて日本の美術工芸に関する講演を行った。列席者のなかには、大隈重信（一八三八—一九二二）、フェノロサ、B・H・チェンバレン Basil Hall Chamberlain（一八五〇—一九三五）、ブリンクリー、セールをはじめ、日本滞在中にリバイティを歓待したあるいは仕事で関係した西欧人や日本人の姿もあった¹²。この講演は日本語に訳され、後に「論説 英國リベルチー氏演説 日本美術ニ關スル意見」と題して全文が『日本美術協會報告第十八號』に掲載された。

講演のなかで、リバイティは自ら日本美術の愛好家と名乗り、「予ノ力ノ及フ限りハ英國ニ於ケル日本ノ美術ヲ養成シ一般民俗ヲシテ之ヲ愛玩スルニ至ラシメンコトヲ勤ムルヲ以テ此ノ二十五年ノ業務トシタリ¹³」と自身の来歴を語った上で、「前略」今日ニ在テハ歐洲各般ノ裝飾美術ニシテ日本ノ影響ヲ被ラサルモノ無ク就中織物陶器及印刷ニ於テ此ノ影響ハ顯著ナリトス¹⁴」と述べ、英国におけるジャポニスムの興隆に貢献してきたという自負心をのぞかせた。また、当初は日本からの輸入品を扱うことに反対する者もいたが、日本の美術工芸品の「奥底ニ於テ其ノ形状ヲ指揮スル靈智トモ精神トモ深思トモ云フヘキ者¹⁵」があると次第に認識されるようになったとし、日本の美術工芸品の特徴は、実用品は目的をもっとも簡潔かつ直接的に達し形状は「愉快」または「雅美」になるように勉め、裝飾を施す場合には裝飾を形状に相応しくしかもその形状の内に自然に生じたかのようにして目的に沿わせることにある¹⁶と述べた。このようにリバイティの日本の美術工芸にたいする理解は、目の前の工芸品の特徴を分析的に捉えた具体的なもので、そこには長い間多種多様な製品に接してきた貿易商らしい鑑識眼がうかがえる。その鋭い鑑識眼をもった英国人貿易商から、日本人の聴衆がもっとも聞きたかったことは西欧における日本美術の評価を高め需要を伸ばすための方策だったに違いないが、それに対するリバイティの見解は「今日ハ既ニ日本美術ヲ應用スルノ範圍ヲ往昔ニ於テ應用シタル範圍ノミニ限ルコトヲ得サルノ日ナリ¹⁷」とする一方で、形状には新しさを取り入れながら「其ノ本躰ニ於テ依然日本美術ノ本性ヲ失ハサル物品ヲ作リイタスコトヲ得ヘキ¹⁸」というものであった。

リバイティは、また、旅の目的はまだ「採鑛¹⁹」されていない日本美術の「鑛脈²⁰」と美術家を発見することだったが、結局何一つ発見できなかったとも述べている²¹。リバイティが日本で見たものは、西欧美術の模倣にやみくもに走る美術家たちであり、それによって崩れつつある日本の陶器、指物、染織、小間物等の品々と社寺や住宅、道行く人々

の姿であったという。リバティもまた西欧に影響を受け急速に変化する日本を嘆く西欧人のひとりだったのである。

「日本の産業美術と手工芸」

帰国後、リバティとホーム^[20]はそれぞれ旅の成果を文章に記した。リバティは「日本の産業美術と手工芸」と題した論文を芸術協会で発表して銀メダルを受けた^[21]。この論文の一部は『ザ・デコレイター・アンド・フアニシャー』誌に^[22]、後に仏文版が『芸術の日本』誌に掲載された^[23]。

リバティはこの論文の冒頭に、「三ヶ月間の日本滞在の折、日本の産業美術の技法に関して、この国に長く居留した名だたる著者たちによって既に余す事なく詳述されたことに、さらに付け加えることはほとんどないと悟った。^[24]」と、視察では何ら新しい発見ができなかったという、日本での講演と同様の感想を記した。

論文は「産業美術と日本人の民族的特性の関連性」を主題に、日本人の感受性や宗教性、道徳性、歴史や気候風土が与えた産業美術への影響を論じたもので、そこには日本の美術工芸に関するリバティの広範かつ詳細な知識が存分に披露されており、各所に挿入される日本滞在中のエピソードが論考に生氣を与えている。ここではその内容の詳細に分け入ることは控えるが、結論には次のように記されている。「日本人の国民的な天分は、独自の性質を保つてきた。それは、自分たちより歴史の古い、おそらくより強い勢力との接触を利用することができ、そこから役にたつものを取り入れ、その取り入れたものをもとに新しいものをつくり進歩してきたのである。^[25]」また、この国民的な天分は「国土と気候の自然条件に「中略」驚くほど相応している」とも述べ、「彼らの美術と手工芸は再び発展し、独自の歴史のなかでもかつてないほどに高く広範な完成の域に達することを予言^[26]」して結んでいる。ここで「より強い勢力」とされているのは中国だが、リバティが日本滞在中に目にしたのは西欧という「より強い勢力」に影響され変化しつつある日本の状況であった。その状況にたいしてリバティが日本での講演のなかで示した解答は、「日本美術ノ本性ヲ失ハサル物品ヲ作」ることであったが、その日本美術の本性の背景に日本の風土や気候の存在を見ていた

のではないだろうか。

リバティは英国におけるジャポニスムの潮流のただなかにいた人物である。その彼がはじめての日本訪問に期待したのは、彼曰く日本美術の新しい「鑛脈^{こうみく}」を発見することであったが、期待はずれにおわった。

リバティが日本を訪れた頃には日本の現地の様子を伝える記録や論説が英国でも出回っており、それらがもたらした情報に彼が通じていたことがこのような結果に繋がったと考えられる。その筆頭にあげられるのは、ドレッサーが一八八二年に発表した『日本―建築、美術、美術製造品^[27]』である。ドレッサーが日本を訪問したのは一八七六年、リバティらを遡ること一〇年あまりのことである。本稿の考察をさらに深めるには、おそらくはリバティも参考にしたであろう、ドレッサーの日本視察を今一度見直す必要があるだろう。一方で、ドレッサーが訪日した頃と比べると日本の美術工芸も変化を遂げていたはずである。例えば一八七三年に明治政府が日本の美術品や美術工芸品を世界に輸出するべく立ち上げた貿易会社、起立工商会社がリバティらの訪日の二年後にはその役割を終えることになったように、明治初期から推し進められてきた日本の産業政策もこの頃には曲がり角にさしかかりつつあった。その意味でも、日本滞在中、リバティが美術の国粹化を提唱する日本美術協会の依頼で講演し、同伴者のイーストが明治初期に西欧化を牽引した工部美術学校の流れをくむ明治美術協会で講演を行ったことは興味深い出来事であった。彼らもまた、日本美術のひとつの曲がり角に立ち会ったといえるのかもしれない。

では、リバティはこの時の日本視察でほんとうに何の収穫も得られなかったかというところ、そうとも考えられない。帰国後に発表した論文において、リバティが日本人の民族性に焦点を絞り、モノではなくそれを産み出す人に注目して、人と自然との関係性にまで踏み込んで美術工芸を人々の日々の営みという視点から論じてみせたことは、日本での体験なくしてはありえないことだったように思われる。

註

- *1 チャールズ・ホーム『チャールズ・ホームの日本旅行記——日本美術愛好家の見た明治』トニ・ヒューバマン、ソニア・アシュモア編、菅靖子編訳（彩流社、二〇一一年）。
- *2 Alfred East, “A British artist in Meiji Japan: a special edition to commemorate the centenary of the Japan Society,” ed. Hugh Cortazzi, (Weathehill, 1991).
- *3 Mrs. Lasenby Liberty, “Japan: A pictorial record by Mrs. Lasenby Liberty,” ed. and text by Lasenby Liberty (Adam and Charles Black, 1910).
- *4 Alison Adburgham, “LIBERTY’S A biography of a shop” (George Allen & Unwin LTD, 1975). 邦訳版『アリソン・アドバーガム『リベティー百貨店』愛甲健児訳（バルコ出版局、一九七八年）も参考にした。
- *5 東田雅博はP・グリーンハルの言葉を引きながら「ジャポニスムは、少なくともこの英国においては、一八六二年万博から始まったのである。」と述べている。『シノワズリーか、ジャポニスムか 西洋世界に与えた衝撃』中公叢書、二〇一五年、一五〇頁。また以下にも同様の記述が見られる。渡辺俊夫「イギリス——ゴシック・リヴアイヴァルから日本風庭園まで」『ジャポニスム入門』ジャポニスム学会（思文閣出版、二〇〇〇年）、七三頁。
- *6 “The International Exhibition of 1862, London Official Illustrated Catalogue & Cassell’s Illustrated Family Paper Exhibitor Vol 1” (Eureka Press, 2014), 119. 出品品については公式カタログ（Vol.4）八八一—一〇一頁を参照した。訳文については公式カタログ付属の松村昌家による日本語解説から引用した。リバティ商会を開業してリバティが店を離れて間もなくフアーマー・アンド・ロジャース商会の東洋品店は閉鎖され、その顧客たちの多くはリバティ商会に通うようになった。エドワード・W・ゴドウィンによると、リバティ商会で日本の扇の荷が解かれると聞きつけて行ってみると有名な二人の建築家と夫人を伴った三人の有名な画家にあったという。（“Afternoon Strolls,” *Architect* 16, 23 December 1876, 363.）ゴドウィンの他に、ジェームス・M・ホイッスラー、アルバート・ムーア、ウィリアム・モリス、ダンテ・ガブリエル・ロセッティらがリバティの店に出入りしていた。（Maho Sakoda, “Liberty and Japonism,” in *Journal of Victorian Culture Online* 2016, 229）
- *7 リバティ商会の製品もおいていたこの店にリバティも出資しており、一八八三年の閉店後にはリバティ商会が在庫を引き取った。
- *8 ホーム、前掲、八一〇頁。
- *9 沼田英子「アルフレッド・イーストと日本」『横浜美術館研究紀要』1（横浜美術館、一九九八年）、二九—三一頁。
- *10 イーストは、七月六日にコンドルの紹介で日本橋の銀行集会所で開催された明治美術協会の月次小会で三〇〇余名の聴衆を前に講演を行った。講演の内容は日本美術の革新を訴え新しい風景画の理想を示すものだった。
- *11 ホーム、前掲、一三五頁。East, *Ibid.* 87. 日本でのリバティの講演については、ホームの旅行記にもイーストの旅行記にも短い記述がある。
- *12 『日本美術協會報告 第十八號』（日本美術協會、一八八九年）四六頁。
- *13 同書、四八頁。
- *14 同書、四七頁。
- *15 同書、四七頁。
- *16 同書、四七頁。

- *17 同書、六二頁。
- *18 同書、六三頁。
- *19 同書、四九頁。
- *20 Charles Holme, “Western Influence upon Art in Japan,” in *The Studio* (1909), 280-284.
- *21 Arthur Liberty, “The Industrial Arts and Manufactures of Japan” in *Journal of the Society of arts* No. 1959 Vol. 38, 673-686.
- *22 Arthur Liberty, “The Industrial Arts of Japan,” in *The Decorator and Furnisher* Vol. 17 No. 2 (1890), 61-65. 出版地はニューヨーク。
- *23 Arthur Liberty, “Les Arts Industriels au Japon” in *Le Japon Artistique* No. 34 (1891). 芸術協会誌掲載論文の一部が抜粋され『ザ・デコレイター・アンド・フニッシャー』誌に掲載されたその仏文版が『芸術の日本』誌にも掲載されたが後の二つの論文には部分的に異なる箇所がある。
- *24 Liberty, “The Industrial Arts and Manufactures of Japan” 673.
- *25 Liberty, *Ibid.*, 673. 邦訳にについては奥田修にちなみ「日本の産業美術」「藝術の日本」美術公論社、一九八一年）四六八頁を参照した。
- *26 Liberty, *Ibid.*, 684.
- *27 Christopher Dresser, “Japan: its architecture, art, and art manufactures” (Green and Co.) 1882.

